



## 2-1 東日本大震災 緊急支援

- 宮城県仙台市・石巻市とその周辺地域

2011年3月11日 午後2時46分、三陸沖を震源とする日本観測史上最大のM9.0の地震が太平洋岸を襲い、その後の津波被害は、東北地方の沿岸部を中心とする広大なエリアに壊滅的な被害をもたらしました。

ジェンでは、地震発災直後から情報収集と資金調達、スタッフの配置を開始し、12日、宮城県仙台市への支援隊の派遣を決定しました。その後、石巻市への拠点を移し、海外や国内での支援の経験を生かし、緊急時から自立をサポートする支援を行ってきました。

2012年現在、現地の方々の自立をサポートするために、地域の方々が協力してともに未来を描く環境づくりを目指す活動へとシフトしています。



CHARITY BOOK PROGRAM



# 世界中からのメッセージ

## アフガニスタンから

ジェン アフガニスタン事務所 スタッフより

2011年3月9日に巨大な地震が日本を襲い、甚大な被害と死者が出たと聞き、この災害は日本だけでなく、日本が平和な国だと信じていた世界中の全ての人々にとって打撃であり、私たちは皆さんと共にその悲しみを分かち合いたいと思います。

パルワン県の知事も過去の日本人とアフガニスタン人との協働に触れ、『悲しみを日本の皆さんと共有する』と発表しました。『パルワンおよびアフガニスタン全ての人々が、全世界の人々の無事を祈っている』と。私たちも、全ての人々、特に東北地方の方々の安全と無事を祈っています。

## 南スーダンから

ジェン 南スーダン事務所 スタッフより

この原稿を書きながら、東日本大震災の被災地で困難な状況のまただ中にある人々のことを考えています。人道支援に従事するジェンの一員として、いま物理的に被災地に行くことはできませんが、祈りをささげたいと思います。日本はこの困難な状況を乗り越え、再び立ち上がる事ができると信じています。日本の全ての人びとに、平穏な日常が戻ってくることを心から祈っています。



世界各国から連日駆けつけてくれたボランティアの皆さん

## イラクの小学校から

「We support you, as you always support us. (あなた方を応援しています、いつもあなた方が私たちを応援してくれているように)」



Bashar Abdul - Rahmanさん(6年生): ニュースを見て、何かできないかと思い友達と一緒に募金をしました。私たちの募金では足りないことは分かっています。けれども、心は日本の人々と一緒にいます。



2011年3月11日  
午後2時46分

東日本大震災

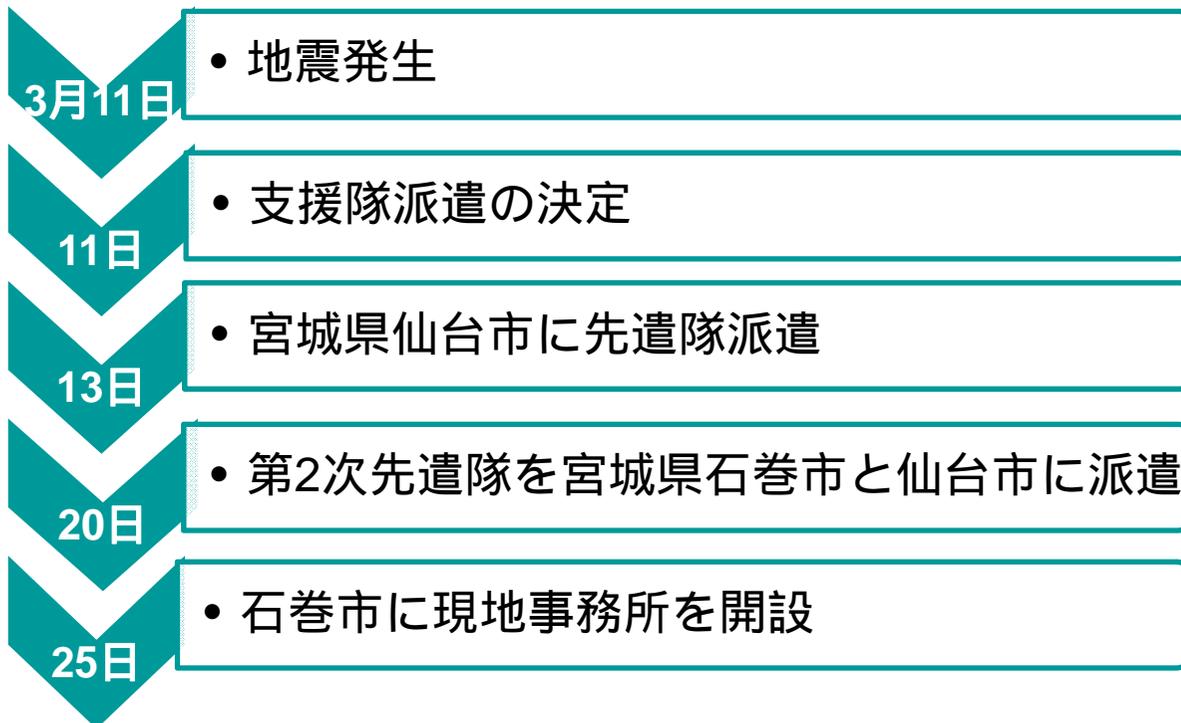


# 緊急支援の流れ



東京本部では、地震発生直後から、被害規模の把握と情報収集、スタッフの配置と物資・資金の調達を開始。ジェンの東日本大震災の緊急支援がスタートしました。

13日、水や食糧、生活用品などの緊急物資を載せて、調査隊(3名)が東京を出発。災害時には、大都市に情報が集まりやすいことから、まずは、宮城県の県庁所在地である仙台市を目指しました。その後、緊急支援とニーズ調査を繰り返しながら宮城県を北上。3月下旬に、石巻市に事務所を開設。以降、現在(2012年9月)に至るまで続く石巻市とその周辺の支援をスタートしました。





# 仙台市へ。被災状況の把握。



14日・早朝に仙台市へ到着。仙台市や区の災害対策本部、ボランティアセンターや避難所を訪問し、最も支援が必要とされているエリアの特定を急ぎました。調査の結果、当時1200人(18日には600人にまで減少)が避難していながら、大津波時の公式な避難所となっていないため、行政からの支援が届かず、運営が混乱していた仙台市立高砂中学校にて、15日、炊き出しや物資の支援をスタートしました。



ガスや電気がなく調理にも限界があるなか、中学生や地域の住民の方々のサポートにより、1200人分の食事を提供することができました。夜は零下を超える東北の寒い冬の中で、被災後初めての温かい食事となりました。



避難所の体育館に到着した炊き出し用の食材と資機材。震災後、支援をお申し出くださった支援者の皆さまにより調達することができました。



# 全国から届いた物資。

メディアを通じて、被害の甚大さが刻一刻と明らかになるにつれ、一般の皆さまからの支援のお申し出は、一日中、ジェンの電話を鳴らし続けました。

ジェンでは、皆さまからの申し出を支援へとつなげるために、急遽、東京都足立区に倉庫を開設。現地で必要とされる緊急支援物資を週替わりで募集。5月中旬までに、15品目の募集に対し、国内外の800人以上の方々から物資をお寄せ頂きました。



## SNSを使った週替わりの物資募集

分単位で変わる物資ニーズの変化に対応するために、独自の物資調達と輸送の仕組みを作る必要がありました。



仕分けの時間を短縮し、最速で現地にお届けするためにアイテム制限や梱包方法、物資の仕様を細かく指定。それにも関わらず、たくさんの皆様にご協力を頂き、必要とされる物資を時差なく現地にお届けすることができました。



集まった支援物資は、週2回、トラックで現地に輸送。



# いわき市へ。



支援の届きにくい 取り残されがちな人や地域へ

## いわき市へ物資配布

3月23日、原発事故の風評被害により物資が届いていないとの情報があった福島県いわき市に物資を輸送。同地域で緊急に必要なとされている、大人用・子ども用の紙オムツ、女性用生理用品ほか、レトルト食品や缶詰(魚・肉)、介護用ウェットタオルなど約3トン分を輸送するため、都内のジェン倉庫(足立区)より2トン車1台が出動しました。



## 灯油の配布

在宅で避難されている方々や老人介護施設など、個別の状況把握が必要な場所への支援が遅れていました。3月24日、ジェンでは、仙台市、多賀城市、石巻市の特別老人福祉施設や家庭で避難されている方々へ、合計4,000リットルの灯油と生活物資の配布を行いました。



# 石巻市へ



震災から10日後、津波の被害が大きい沿岸部にある宮城県石巻市へ次期調査隊を派遣。

避難所の人口滞留率が最大で減少の見込みも立たず、死者・被災者数において最も大きな被害を受けた石巻市とその周辺での調査と支援をスタートしました。



## 被害状況

- 死者 3,280人
  - 行方不明者 553人
  - 全人口の70%にあたる110,000人が被災
  - 家屋28,000棟が全壊
  - 259ヶ所の避難所に住民50,758人が避難
- (2011年3月18日時点)



石巻市市街地の被害(2011年5月。日和山公園より撮影)



# 支援の各段階



## 第1段階: 避難所/在宅被災者への支援

食料・水・衣類・衛生・薬・心のケア



## 第2段階: 仮設住宅/在宅被災者への支援

緊急の生活支援・生業支援・コミュニティ支援・心のケア



## 第3段階: 再定住へ向けての支援

雇用創出・コミュニティ支援・心のケア



# ニーズの調査

## 支援の格差とニーズの複雑化

震災から1週間後 - 。  
仙台市を中心に道路の復旧が急ピッチで進められ、電気や水道が復旧しつつあるなか、避難所へは市や自衛隊からの支援が届き始めました。それに伴い、避難所の人数が急速に減少し始めました。一方で、未だ孤立している地域や避難所も多く、アクセスのよい地域と悪い地域での支援の格差が顕著になるなど、今後はより遠隔地を対象とした調査と支援の必要性を把握しました。

沿岸部の被害が甚大なエリアでは、役所自体が津波で流されているなど、支援の手も届かず、それを調整する役目も機能していない一方で、都市部でも、津波で家自体を失った人々は帰還する見込みがなく、避難所の過酷な環境での滞在を続けていました。避難生活は長く続くことが予想され、状況とニーズは複雑化していました。



被害が甚大にも関わらず取り残されているエリア(南三陸町、女川市、東松島市、石巻市)を中心にニーズ調査を実施。



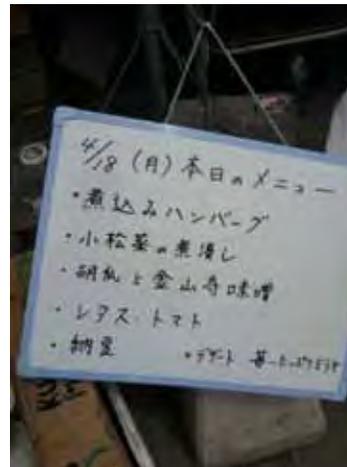
# 在宅避難者への支援



## 炊き出し

一階が津波で流され、台所などの調理設備がない在宅避難者の方々を対象に、温かく栄養のある食事を提供しました。地域の方のご自宅の敷地をお借りし、在宅避難者が最も多いエリア（中屋敷地区、鹿妻地区）で、4月～7月までの間、一日も休むことなく実施しました。期間を通じて157名のボランティアの方の力をお借りし、地域の方々へ4,067食をお届けしました。

地元の商店が本格的に再開した7月、約3か月間続いた炊き出しは終了しました。





# 在宅避難者への支援



## 物資の配布

石巻市内には、ご自宅に介護する方を抱えていたり、長引く避難生活で心身ともに不調が出てくるなどの理由で避難所生活が難しいことから、被災した自宅の2階に住んでいらっしゃる「在宅避難者」の方が、ピーク時には2万人を超えました。

避難所と違い、そのような方々の実態は把握し難く、支援も届きにくいことから、在宅避難者の方々を対象に、食糧や生活物資の配布を行いました。

石巻市内やその周辺(雄勝町、牡鹿半島)、東松島市の避難所や公共のスペースをお借りし、FMラジオを通じた呼びかけと物資の配布を行いました。



Photo: ©Fast Retailing Company



「配布する」という方法ではなく、アイテムやサイズをご自身で選択できる方法で実施しました。震災後の避難生活の中で、買い物という日常生活から、突如、切り離されてしまった方々に、好きなアイテムを「選ぶ」という行為を通じて、買い物をしているような気分を体験していただき、避難生活のストレスを和らげる効果をもたらしました。



# 避難所の運営サポートと心のケア

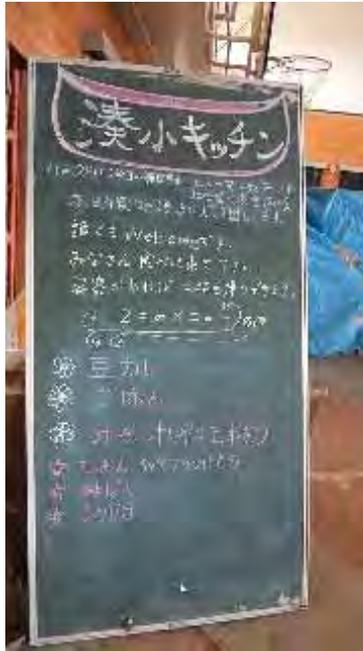


ピーク時には約2,600人の避難所となっていた石巻市立湊小学校にて、避難所運営のサポートや各種活動を通じた心のケアを実施しました。被災の経験に加えて、長引く避難生活やプライバシーがない環境での生活はストレスが多く、精神的にも負担がかかります。避難所での生活環境を改善することで、前向きな心を取り戻していただくための活動を行いました。



専門家によるマッサージ

## 避難所の運営サポート



(左)住民の方々による「湊小キッチン」



(右)ボランティアの皆さんによる避難所の清掃活動



シルク・ド・ソレイユによるフィジカル・セラピー

## 避難所での心のケア・プログラム

避難所では、プライバシーの欠如や狭い場所での寝泊りによるエコノミー症候群、運動不足などの健康被害も懸念されました。ジェンでは、様々なご支援者のサポートをお借りして、避難所での心のケアプログラムを実施しました。



## 仮設住宅向けスタートキットの支援



避難所で生活を送る方々のサポートをする一方で、4月末から順次始まる仮設住宅への入居の準備がスタートしました。仮設住宅へ入居された方々が、入居したその日から日常生活が始められるよう、13,070世帯(プレハブ仮設住宅6,890世帯、みなし仮設住宅6,180世帯)へ約70種類の生活必需品を配布しました。



(左) 地域のアルバイトや全国からのボランティアの方々により  
一戸一戸への配布を実施

(右上) 配布したアイテムのチェック



生活用品70アイテム



## がれきやゴミの撤去



街中を覆い、固まった汚泥。



### ボランティアの受け入れ

街全体を覆った汚泥は、ヘドロや加工場の魚や物質などを含むことから、悪臭を放ち始め、乾き始めた泥が粉じんになって舞うようになると、健康への影響も懸念されていました。住宅街の家々の中にも泥が入り込み、流れ着いたがれきやゴミが山のように積もっていました。

重機では撤去できない、家々の細かいお掃除や地域の環境を復旧するために、ボランティアの受け入れを行いました。「マッドバスターズ」と名付けられたこのボランティアには、国内外から、約4,600人もの方々が参加してくださいました。



- **ガレキ撤去作業キット1,000 セット**  
ゴム手袋 / 雨具 / 長靴2 / シャベル / バケツ / 一斗缶 / 砂袋 / 長ブラシ / ほうき / ゴム製水切り / モップ / ちりとり
- **手押し車 200台**



## 「ガレキ撤去作業キット」の配布

震災後、急激な需要と流通のストップにより調達が困難だったがれきや泥出しの道具を東京で入手し、石巻へと輸送しました。地域コミュニティ(公民館)やボランティアセンターへ譲渡することにより、地域やボランティアの方々が必要に応じて利用できるような方法で配布を行いました。



## がれき撤去業者のサポート



ボランティアの手による地域や家庭の瓦礫や汚泥撤去が進む一方で、石巻市内に散乱する616万トンの瓦礫や解体瓦礫(半壊した家などで解体の必要があるもの)などの大規模な撤去作業を要する作業は、その量の膨大さから処理能力が追いつかず、対応し切れない状況が続いていました。

瓦礫を取り除かなくては新しい街づくりは物理的に進まず、行政が瓦礫の処理に追われていては復興に向けた取り組みが始まらないなど、復興のスタートラインに立つために、瓦礫の処理は急務でした。

ジェンでは、震災で車両を失った市内7つの廃棄物処理業者にトラック29台を無償で貸与し、瓦礫撤去作業への貢献、個人事業主の営業再開、それに伴う雇用の復活を目指しました。



3か月間で、総売上 4,200万円、瓦礫撤去量 15,071 トン、雇用創出: 1,957人/日を達成



解体を待つ家が約 7,000 軒(12月末時点)



# 仮設商店街で地域活性化をサポート



石巻市中心部から約35kmに位置する牡鹿半島最南端の鮎川浜で、津波により店舗を失った地元の個人商店主の方々が、当面の営業を行うために必要な仮設商店街「おしかのれん街」を建設し、11月にオープンしました。

鮎川浜は、牡鹿半島の中心であり商業エリアです。「のれん街」のオープンにより、居住地域内で震災以前のように買い物や外食をすることができるようになります。再建に意欲のある商店主や開業を目指す事業主の営業再開の支援など、商業街としての復興をサポートする一方で、高齢者の買い物環境の改善と向上を図りました。



仮設住宅に住む地域住民は、週1回の復興市を利用したり、車で片道40分かけて日用品の買い物や外食に出かけるなどの不便な生活を送っていました。公共バスは本数が少なく長時間の移動となり、高齢者にとっては厳しい生活が続いていました。



震災前、周辺には4,882人が居住し、牡蠣やホタテ、ワカメ等の養殖漁業、観光地・金華山への発着港や宿泊所としての観光業が盛んでした。集落内には住民や観光客向けの小さな商店が40～50軒ほど営まれていましたが、津波により集落や施設が流され、壊滅的なダメージを受けました。